

## 中支、満州、シベリア

島根県 田 淵 峯 夫

### 出生から入隊

僕は、大正十四年七月十三日生まれで、本籍・現住所とも同じで、家族は祖父母、弟妹の十一人で、松江農林学校を卒業し農業に従事していた。昭和十九年十二月十日、現役兵として浜田西部第三部隊に入営し、その後、中支藤部隊へ派遣となり、二十年七月上旬ごろ満州防衛のため公主嶺に到着し、終戦はラジオ放送で知った。

### ソ連軍侵攻からシベリア収容所への旅

ソ連軍が八月二十日ごろ現れたが交戦せず、我々は約一週間ほど完全武装のまま過ごしていたが、日ソ間の交渉で武装解除に応じた。その後赤痢にかかり、部隊を離れ単身で四平街の陸軍病院に入院し、一カ月後に退院となり、ソ連管理の作業隊五百人と行動を共に

し、黒河―ブラゴエシチエンスクール―ツク第一収容所に十二月初旬ごろ着き、二千人と極寒の中で飢えと重労働を体験し、二十一年六月、行き先知れず貨車でウズベク共和国タシケント収容所やカザフ共和国チエリニウジャーク収容所など、二十三年夏まで転々と移動させられた。

### 抑留生活の実態

収容人員は千五百人くらいで、既存の建物で暮らし、暖房、電灯、二段ベッドもあった。作業は雑役、左官、鉄道機材運搬などで、触診による健康診断があり、等級別によって働かされた。ノルマ達成は大して厳しくなく、特に重労働とは思わなかったが、寒さとすきっ腹がこたえた。

### 統制管理

就労規則はなかったが、一日の労働は八時間くらいで週一回は休日を与えられた。タシケント第五ラゲルで日本人による民主教育があった。幹部は選挙で決め、アクチーブが自主管理した。

### 帰還と帰国後の生活

二十三年七月、待ち遠しかった東京ダモイの日が来た。タシケントを出発し、ナホトカ出港、舞鶴上陸は七月十九日だった。

故郷に帰って、入隊前と同じ環境で頑張って現在に至っている。

## シベリア抑留記

大阪府 杉山 森一郎

私は、大正十一年三月六日、兵庫県水上群美和村（現、市島町）酒梨七二五ノ二、杉山庄吉の次男として生まれました。当時、父は群是製糸倉吉工場の技師として勤めており、家では母が農業と養蚕を行っておりました。家族は、祖母と両親と男子二、女子五の七人兄妹でした。

私は兵庫県立柏原中学校を経て、旅順工科大学技術員養成所を卒業後、新井特別市（現、長春）の満州鋳業開発株式会社鋳産資源調査所に勤務し、非鉄金属鋳

床の調査に従事しており、関東軍及び海軍武官府にもその調査資料を届けておりました。

軍隊には昭和十八年一月に北滿海拉爾の第八国境守備隊第二地区隊歩兵連隊第五中隊に入隊。連隊砲小隊（四一山砲）で、十九年には歩兵砲中隊となりました。私は連隊の兵器委員室に勤務し、兵器、弾薬を扱っておりましたが、同年末ごろ編成替えになり、東山地区にて第一一師団の第三六二部隊歩兵砲中隊となり、二十年春ごろには部隊は興安嶺にて陣地構築を行っておりましたが、私は部下数名とともに海拉爾に残っておりました。ソ連参戦で朝から海拉爾は爆撃に違い、同日夜を徹して後退、博克図近くの興安嶺の本隊に合流、敵の戦車攻撃に対して迎撃の陣を張っておりましたが、命により齊々哈爾に退き、武装解除は榆樹屯で、その時韶勅の放送は聞きましたが、ラジオは雑音が多くはつきり聞き取れませんでした。

この地にて一カ月余り過ごし、九月下旬にこの榆樹屯より二段の有蓋貨物列車に乗せられ、五百人単位の大隊にて満州里を経て東に回り、「ダモイ」のはずが